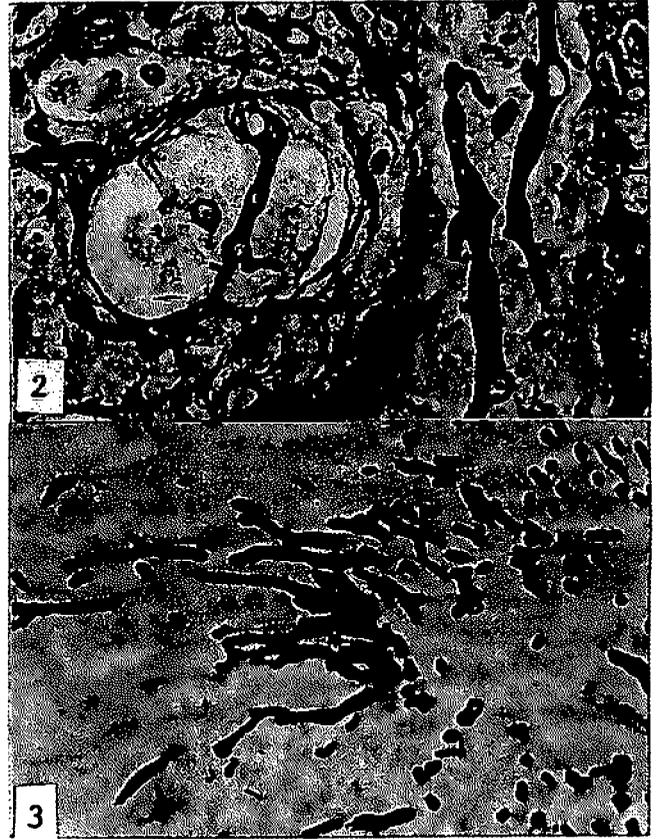
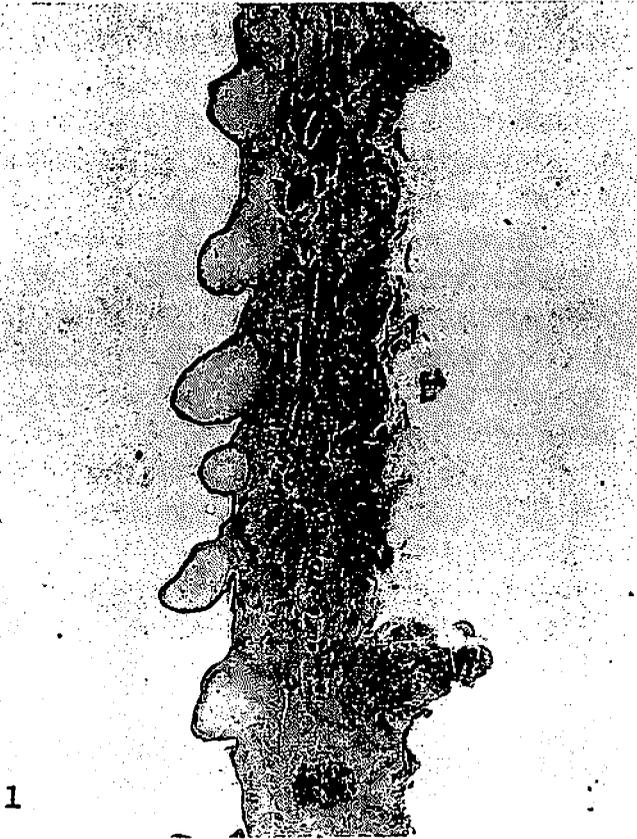


牛の第3胃

帯広畜産大学家畜病理学教室出題

第21回獣医病理学研修会標本No.345



動物：牛，ホルスタイン種，雌，5歳。

臨床事項：本例は1980年7月24日に正常に仔牛を分娩したが、その後発熱、食欲不振、下痢、血尿の症状を示したので抗生剤を主とした治療を行なった。しかし、好転の兆を見せず、8月6日日本学附属家畜病院に入院したが、既に乳房炎、胸膜炎を併発しており予後不良と診断し、翌7日放血殺を行なった。

肉眼所見：1) 削瘦，2) 全乳区に亘る粟粒大結節病巣の密発，3) 腎の軽度の腫大，4) 肝の混濁と脂肪化，5) 線維索性胸膜炎，6) 第3・4胃口付近の胃葉に局限した出血を伴う壊死巣，7) 両側肺における粟粒大結節病巣の散発。

第3胃の組織像：提出標本は、肉眼所見で認めた第3胃病巣の胃葉の一片で、そのH・E染色標本である。弱拡大で見ると、病変は全般に亘るが、特に一側面が強い(写真1, H・E, ×13)。上皮層の剝離、一部は浅い潰瘍を形成し、粘膜固有層は水腫、充出血とともに血栓の形成が随所に見られ、壊死の傾向が強い。特殊染色を施すまでもなく、この病巣中には隔壁を持たず、太くかつ疎に分岐する菌糸が到る所に見られる(写真2, Grocott, ×400)。一方、標本の下端に近く、核破片を混じた好中球の集族

巣が比較的限局して認められる。標本によってはその中心に密に分岐した菌糸が花火のように周囲に広がり、その菌糸は前記のものとは異って一定の幅を有し、隔壁を持ち、進展方向に向ってY字型の分岐が明瞭である(写真3, Griedley, ×400)。この病巣周辺に、これらの菌糸が血管内に侵入し、一部は血栓の形成を伴っているものもある。菌糸の形態学的特徴から前者はムコール、後者はアスペルギルスで、それぞれの特徴のある病変を同一切片内に示している。

組織診断その他：本例において、真菌による病変は第3胃以外に肺および乳腺に見られた。何れもアスペルギルスによるもので、その病変は第3胃のものと同様であった。また、ムコール菌が血管に侵入する傾向が強いことは、この真菌の一つの特徴とされているが、アスペルギルスもこの傾向があり、同一臓器、組織内の広がりにはこのことを重視すべきであろう。しかし、乳腺、肺、前胃その他においては健康牛でもこれらの真菌が存在するので、必ずしも原発巣が一カ所と考えるのは危険であろう。

この標本の組織診断は「真菌(アスペルギルス、ムコール菌)による第3胃炎」とした。